

陸連時報 三

2015
平成27年

11

月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

第15回世界陸上競技選手権大会(2015/北京)を終えて (日本選手団団長 尾縣貢(専務理事))	198
世界選手権総評及び反省(日本選手団監督)	199
第15回世界陸上競技選手権大会(2015/北京)各ブロック報告(強化委員会)	200
第23回日・韓・中ジュニア交流競技会報告(日本選手団監督 村田勇)	205
インターハイにおける科学委員会研究活動報告(科学委員 小山宏之)	206
国際陸上競技連盟(IAAF)カOUNシル会議(北京)報告 (前IAAFカOUNシルメンバー 田中克之)	208
国際陸上競技連盟(IAAF)総会報告(事務局)	210
大会観戦ガイド	211
陸協NEWS	212
事務局からのお知らせ	214

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

第15回世界陸上競技選手権大会(2015/北京)を終えて

日本選手団団長 尾縣 貢(専務理事)



207カ国・地域から2000名近いアスリートが参加したグローバルイベント、第15回世界陸上競技選手権大会(以後、世界陸上)は、8月22日に北京市の国家スタジアム(通称:鳥の巣)で開幕を迎えた。開会式には、習近平国家主席が出席し開会を宣言したことから、中国では国家

行事としての扱いであったことがわかる。そのため、大会前から懸念されていた大気汚染は、自動車の通行をナンバープレートで規制することや、市内の工場を操業停止にすることなどで解消された。見上げる空は青く、これが「世界陸上」と、9月3日の「抗日戦争勝利記念日」のパレードのためと言うことで、地元では「世界陸上ブルー」「パレードブルー」と呼ばれた。

リオデジャネイロオリンピック前年の世界陸上ということもあり、各国の精鋭が勢ぞろいし、極めて高いレベルの競技が展開された。

大会全般を通して

常勝、モハメド・ファラー(イギリス)が5000mと10000mで、ウサイン・ボルト(ジャマイカ)が100m、200m、4×100mリレーで、ロンドンオリンピック、モスクワ世界陸上に続き優勝を飾った。両名は、陸上界を代表するスーパースターであり、彼らの登場にはスタンドからより大きな声援が送られ、スタジアムは大いに盛り上がった。日本においても、陸上ファンの獲得や競技会での盛り上がりのためには、室伏広治氏の後を継ぐような真のスーパースターの登場が必須であることを実感した。

常勝アスリートにも劣らぬ声援が送られたのは、男子やり投で92m72のビッグスローで優勝を飾った身長179cmのジュリアス・イエゴ(ケニア)、女子200mで並み居る強豪を抑え、21秒63の大会記録で優勝した元7種競技者のダフネ・シパーズ(オランダ)の新星であった。この両名の活躍には、多くのアスリートが勇気づけられたものと思う。大きな体格差を克服してのイエゴの勝利、ジャマイカやアメリカの常勝軍団を抑えてのシパーズの勝利は、多くのアスリートに活躍の可能性を示してくれた。

各国のメダル獲得数の変動も興味深いものであった。本大会で最も多くの金メダルを取ったのはケニアとジャマイカで、その数は7個。アメリカ、ロシアの強豪国を押さえてのトップである。ロシアは、前回の地元大会では金7個を含む17個のメダルを獲得したが、今回はメダル4個と全く精彩がなく、加速度的な競技力の低下を示した。前大会から大きく躍進をしたのが、ポーランド(メダル3→8個)、中国(4→9個)であった。この躍進の裏には、独自の強化戦略があっ

たものと推察できるので、情報を収集・分析していきたい。2020年までに残された時間は長くない。海外の成功例も参考にしながら強化の戦略を構築することも考えるべきである。

日本チームに関して

詳細な振り返りは、強化委員会に委ね、ここでは総括的な評価をしたい。本大会を翌年のオリンピックの試金石として位置づけ、男子36名、女子17名、合計53名の選手団を派遣した。選手団の数値目標を「メダル2、入賞6」に設定したが、男子マラソンの今井正人選手(トヨタ自動車九州)の髄膜炎による出場辞退、男子20km競歩世界トップランカーの鈴木雄介選手(富士通)の恥骨炎による途中棄権などもあり、厳しい戦いを強いられた。「メダル1、入賞2」という結果は、多くの陸上関係者、ファンの皆様の期待を裏切ることとなった。この結果は、重く受け止めなければならない。来年に迫ったリオデジャネイロオリンピックに向けては、ターゲットアスリートを明確にしたうえで、それぞれのブロックで迅速に細やかに強化策を実行していく必要がある。

本大会での日本記録は女子4×400mリレー、パーソナルベストは女子5000mの鈴木亜由子選手(日本郵政グループ)、シーズンベストは6であった。種目によっては、圧倒的な力の差でねじ伏せられたという感はなく、少しずつ力が足りなかったという印象が持たれた。そのため個々の課題を明確にし、それを克服するためのテーラーメイド型の強化も考えていかなければならない。

同時に、2020東京オリンピックを見据えて、中期的な強化育成も引き続き推進していかなければならない。今回、サンブラウン アブデルハキーム選手(城西大学附属城西高校)、平松祐司選手(筑波大学)、鷺見梓沙選手(ユニバーサルエンターテインメント)の3名のユース・ジュニア世代も参加した。この3名をはじめとする若手アスリートに海外での高いレベルの競技会などを積極的に経験させることで国際競技力の向上を図っていきたい。

また、女子の競技力向上にも力を注いでいく必要がある。今回の女子の代表は17名、そのうち長距離、マラソン、競歩を除く個人種目では、福島千里選手(北海道ハイテクAC)、海老原有希選手(スズキ浜松AC)の2名のエントリーに留まった。この女子の競技力の停滞に危機感を感じ、これまでの強化策の見直し、そして新たな強化のあり方の検討を急ぎたい。

本大会の選考会となった競技会の開催に御尽力をいただきました加盟団体および協賛各社、日本実業団陸上競技連合、日本学生陸上競技連合をはじめとする協力団体、活動を支援していただいていますオフィシャルパートナーのアシックス、オフィシャルスポンサーおよびオフィシャルサプライヤーの各社、陸上ファンの皆様から感謝の意を表しますとともに、今後一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

世界選手権総評及び反省

日本選手団監督

はじめに

第15回世界陸上競技選手権大会が8月22日から30日まで、207カ国1936人の選手が参加して北京で開催された。日本選手団も男子36名、女子17名、役員28名の選手団で臨んだ。

大会に向けての取り組み

今大会からエントリーシステムが大幅に変更になり、選考についても一度に決めることができなく三回の選考によって最終的に選手が選考された関係で、大会に向けての準備が事前に来たブロック（男女長距離、マラソン、競歩、混成など）と8月3日、10日で最終的に決定したブロック（男女短距離、ハードルなど）もあり、全員が一堂に集まっただけの最終ナショナル合宿ができなかった。しかし、各ブロックで7日から14日で、男女短距離、ハードルは山梨の富士吉田市で、跳躍、投擲、混成はNTCで最終合宿を実施、競歩は長期に千歳で、女子長距離・マラソンはアメリカ、男子長距離・マラソンは北海道で実施していた。各ブロックに合った環境での合宿で指導者と選手のコミュニケーション、大会での情報共有、戦略など選手にとって大会に向けての意識向上ができたことは良かったと思っている。また、開催地北京の滞在についても、大気汚染の心配などから最大限に考慮し、ほとんど時差等も無く、フライト時間も短い関係で、競技日程に合わせて複数回で移動し、入村できたことも非常に良かったと思っている。

現地での環境

当初心配していた大気汚染については、18日に入村してから、日に日に天候が回復し、北京では珍しく、青空が窺えるような天候で、どんよりした環境とは違い、思ったより快適な天候であった。気温が高く、湿度が低い環境で条件としては夏の競技大会としては良かったと思っている。

また、ホテルから会場までは、シャトルバスで10分、徒歩でも15分とアクセスについても問題なく、練習会場もサブトラックが使用できたことは良かった。食事についても、中華料理だけではなく洋風の食事などもあり、野菜、果物なども豊富で、問題なかった。

大会経過

今大会での日本チームの目標を「メダル2、入賞6」を掲げて臨んだが、結果的に「メダル1、入賞2」という最低の結果に終わった。前回大会の成績にも及ばなく、リオデジャネイロオリンピック前年での世界選手権だけに期待された成績を上げることができなかったことは、応援いただいている多くの陸上ファンの方々にも大変申し訳なく思っている。

大会初日男子マラソンでチームの勢いをつけてスタート予定であったが、惨敗に終わり、2日目の20km競歩に期待して臨んだが、世界記録保持者の鈴木雄介選手がレース途中で恥骨部分に痛みが出て棄権、世界ランキング4位の高橋英輝選手も後半スタミナ切れでレースについて行けず47位、藤澤勇選手も粘ったが13位に終わり、メダル、入賞が期待された種目が惨敗に終わり非常に残念であった。なんとか流れを変えようと、スタッフミーティングを行い、これからの選手の奮起に期待した。その中で女子100m福島千里選手が予選で流れを変えるような向風の中11秒23(SB)の素晴らしい走りですべて決勝進出し、男子やり投で新井涼平選手が84m66の記録で全体の2位で決勝進出、男子200mでも藤光謙司選手、サニブラウン アブデルハキーム選手、高瀬選手3人も予選通過して準決勝進出した。特に16歳の最年少で出場したサニブラウン選手がガトリン選手に次ぐ2着でゴールし、世界ユースチャンピオンの実力を発揮できたことは、大変素晴らしいことであり、チームとして少しずつ良い流れが出てきた。しかし、準決勝の壁は厚く、今までの世界

選手権での決勝進出記録より、非常にレベルが高く女子100mでも10秒台、男子100mでも9秒台、男子200mでは今まで20秒3台で通過していたが20秒1台であり、他の種目についても同様であった。日本選手準決勝に進出した男子200m(藤光選手、サニブラウン選手、高瀬選手)女子100m(福島選手)共、決勝進出ができなかった。男子棒高跳でも、山本聖途選手、荻田大樹選手と共に5m65で予選突破できず、男子走幅跳の菅井洋平選手も7m92で全体の16番目で決勝進出できなかったが善戦した。男子やり投決勝では新井選手が83m07で9位に終わり、83mを投げて入賞できないまでのレベルの高さであった。残念である。大会7日目まで入賞者0で非常に危機感を感じていたが、8日目、入賞の期待がかかった男子50km競歩では、谷井孝行選手、荒井広宙選手、山崎勇喜選手の3人が冷静なレース展開で特に谷井選手、荒井選手は常に上位のグループでレース展開し、お互いに意識しあい、最後まで二人でレースをつくっていたことが、谷井選手が3位で銅メダル獲得、荒井選手が4位入賞に繋がった。チームとしての戦略が生かされた結果でもある。20km競歩の失敗が50km競歩に生かされた結果で、日本チームとしてもホットした瞬間でもある。メダル獲得できたことは日本チームにとっても重要なことであった。また、入賞が期待された男子400mリレー予選では、アメリカ、イギリス、ドイツとの争いで、メンバーとして予定していた高瀬選手が200m準決勝終了後に1度の肉離れを起こし、急きょオーダーを変更して臨んだ。ワールドリレーズのメンバー3人(大瀬戸一馬選手、藤光謙司選手、谷口耕太郎選手)と長田拓也選手を起用し、予選に臨んだが、長田選手からアンカー谷口選手へのバトンパスにミスがあり、谷口選手がドイツを追い上げたが100分の3秒及ばず4位でプラスに入らず、9位で決勝進出することができなかった。実力がありながら決勝に行けなかった悔しさが残った。最終日の女子マラソンでは、32kmまで3選手がトップでレースの集団にいたが、32km過ぎからのペースアップについて行けず、最後まで粘った伊藤舞選手が7位に入賞し、前田彩里選手は13位、重友梨佐選手が14位であった。大会最終日のトラック種目決勝進出した女子5000mでは、尾西美咲選手、鈴木亜由子選手が積極的に集団を引っ張り、ケニア、エチオピア選手と堂々と戦い、速いレース展開に持ち込んでレースを進めたことが、優勝したAYANA選手の大会新記録に繋がり、最後まで粘った鈴木選手がラスト100mの勝負で敗れ、9位に入り、入賞ができなかったが素晴らしい走りを最後にみせてくれた。自己新記録での9位は大健闘である。また、女子4×400mRで女子短距離の念願でもあった日本記録更新を狙ってのレースに青山聖佳選手・市川華菜選手・千葉麻美選手・青木沙弥佳選手のオーダーで、若手、ベテランが上手く噛み合い3分28秒91の日本記録更新を世界選手権で出したことは価値があり、これからの女子短距離にいい刺激になったに違いない。

最後に

今大会を終えて、個人種目でのSB5、PB1である現状を考えると、次のラウンドに進むことが難しく、これだけのレベルが向上している中では大きな課題でもある。その為にも、どの大会においても常にSB、PBに近い記録を求められる為、個人の記録のアベレージを高めていく必要がある。

今後リオデジャネイロに向けて、目標の水準を上げて取り組んで行かなければならない。その為の軌道修正を強化委員会で早急に行っていきたい。

大会期間中に選手団役員の皆様へ、ご尽力いただき誠に感謝しております。

※SB…シーズンベスト、PB…パーソナルベスト

第15回世界陸上競技選手権大会(2015/北京)各ブロック報告

強化委員会

〈男子短距離ブロック〉

男子短距離部長 苅部 俊二

男子100mは高瀬慧選手(富士通)が出場し、10秒15(-0.1s/m)で4着となり予選で落選という結果であった。70m過ぎまでは良く検討していたが後半南アフリカのシンベネ選手に抜かれ惜しくも4着に終わった。上位3名は9秒台のベスト記録を持つ選手であり、予選通過ラインは10秒12までであったことからよく健闘したといえる。

決勝進出が期待された男子200mは、高瀬選手、藤光謙司選手(ゼンリン)、サニブラウン アブデルハキーム選手(城西大城西高)の3名が出場した。高瀬選手は、予選を20秒33(-0.2s/m)の組4着で、準決勝に進出し、準決勝では20秒64(+0.8 s/m)で落選した。藤光選手も予選を20秒28(-0.3 s/m)で、組2着で余裕をもって通過、決勝進出に期待がかかったが、準決勝では100m過ぎまでは上位で健闘したものの20秒34(+0.8 s/m)の組7着で落選した。サニブラウン選手も予選を20秒35(±0.0 s/m)で2着で通過、準決勝は20秒47(-0.2 s/m)で残念ながら落選した。出場3名全員が準決勝進出を果たし、準決勝でも勝負しており、あと1歩で決勝進出のところまで力をつけてきている。高く評価したい。

男子400mは金丸祐三選手(大塚製薬)が出場した。予選はアウトレーンということもあり、前半から積極的に飛ばしたが、後半失速し45秒65で残念ながら6着に終わった。準決勝進出のプラスラインは45秒08とレベルの高い予選であった。

前大会6着、ワールドリレーズでは銅メダルと獲得している男子4×100mリレーは今大会も決勝進出はもちろんメダル獲得も期待された。予選は1走を予定していた高瀬選手の脚の調子が思わしくなく、1走大瀬戸一馬選手(法政大)、2走藤光選手、3走長田拓也選手(法政大)、4走谷口耕太郎選手(中央大)のメンバーで臨んだ。アメリカ、イギリスにはやや離されていたものの、3走までは3位の決勝進出圏内に位置していた。しかし、3走と4走でバトンミスがあり失速、38秒60で4着に終わり予選敗退した。避けることの可能であったミスであり、悔やまれる結果であった。今回のメンバーは、若いメンバーであり、走っていない高瀬選手やサニブラウン選手、代表漏れした桐生祥秀選手(東洋大)など日本リレーチームも層が厚くなってきている。今回の失敗を教訓に来年度のオリンピックはメダル獲得を目指したい。

4×400mリレーは前半から上位で展開するためにスピードランナーの田村朋也選手(住友電工)を1走に配置し、2走金丸選手、3走小林直己選手(東海大)、4走北川貴理選手(順天堂大)で予選に臨んだ。田村選手は積極的な走り前半をリードしたが後半失速し6位あたりで2走金丸選手にバトンを引き継ぐとその後も上位に上がることなく3分02秒97の記録で7着に終わった。2分台を出さないと決勝進出はできない近年では最もハイレベルの予選であった。来年のオリンピックに出場するためには3分02秒台では難しく、来年、さらにその先に向け、日本400m陣には再強化の必要性を強く感じさせる大会となった。

今大会はトップの記録はそれほど今までの大会と変わりはないが、準決勝や決勝への通過ラインの記録が非常に高くなっており、各種目の底上げが強く感じられた。またアメリカやジャマイカなどの強豪国だけでなく新興国の台頭も顕著であった。日本陸上界の強化体制の再検討、再構築が急務であろう。

〈女子短距離ブロック〉

女子短距離部長 瀧谷 賢司

女子短距離チームは、今大会において、100m・200mに福島千里選手(北海道ハイテクAC)、4×400mリレーに青山聖佳選手(大阪成蹊大)、市川華菜選手(ミズノ)、千葉麻美選手(東邦銀行)、青木沙弥佳選手(東邦銀行)、石塚晴子選手(東大阪大敬愛高)をエントリーする事が出来た。

大会の結果は、福島選手が100mの予選で11"23(-0.5 s/m)と日本記録(11"21)に迫る快走を見せてくれた。タイムもさることながら世界のステージで日本の女子選手が対等にレース出来たのは歴史上初めてではないだろうか。日本の女子選手に希望の灯りが見えたレースでもあった。又、中村先生(北海道ハイテクAC)との長年に渡るトレーニングの成果を日本の各指導者は冷静に評価しなければならないと感じた。200m(予選23"30(+0.1 s/m)5着)に関しては、150m以降のスピード低下が課題として見えたレースであったが、コーナーからの抜けの走りは素晴らしかった。今後、福島選手に期待するのは、海外での合宿及びレースの経験を豊富にする事と、基礎的、専門的な体力作りの完成が世界(リオ・オリンピック)に通用する強い選手になる道のりであると信じている。

4×400mリレーに関しては、青山選手-市川選手-千葉選手-青木選手のオーダーで最低日本記録更新を目標に臨んだ。各選手のラップと結果は、青山選手(52"74)-市川選手(51"55)-千葉選手(52"21)-青木選手(52"41)で3'28"91の日本新記録を樹立した。レースの流れは、青山選手が4着で市川選手に引き継ぎ、市川選手がレースの流れをつくる好走を見せてくれた。千葉選手は、今までの経験を生かした安定した走り青木選手に継ぎ、青木選手は粘り強い走り8年振りの日本記録であった。又、世界と戦うための課題もうきほりになった。具体的には、各選手のフラットレースでのレベルアップが不可欠であると感じた。世界と戦う為(3分25秒台)には、51秒台前半のエース選手と52秒台前半の複数選手を育成する事が目標となる。又、スピードを生かしたレース展開が必要である事が再確認され、各選手の200mのレベルアップが今後の戦略のための課題になった。

今後の女子短距離チームの取り組みとして、将来性豊かなジュニア層の選手達の意識づけを明確にし、確かな方向性を具体的に伝えていく事が全体の層の厚さにつながるものと確信する。また、全てのスプリント種目をこなせるマルチスプリンタを育成する事も必要である。

リオデジャネイロオリンピック・東京オリンピックに向けては、各選手の間力向上、海外での経験・パーソナルコーチとの連携(意識や競技に関する価値観の共有)も課題である。

以上の課題点を基に、女子短距離チームは福島選手を軸に個々の自立した競技力・競技観の充実を目指し2016オリンピック・2020オリンピックに向かいたい。

〈ハードルブロック〉

ハードル部長 櫻井 健一

今大会ハードル種目の代表選手として男子400mHに3名が出場をした。選手は岸本幸彦選手(富士通)、小西勇太選手(住友電工)、松下祐樹選手(チームミズノ)の3名が出場した。代表選手3名共に調整は順調に行え、レースの4日前に選手村へ入村した。入村してからの調整も順調に行い、本大会に臨むことができた。

本大会における予選ラウンドは5組あり4着プラス記録上位者4名が準決勝に進出できる基準であった。準決勝が3組あるため、予選は比較的通過しやすかったといえる。

予選では1組目に岸本選手が出場した。得意の前半から積極的なレース展開ができ、中盤までは順調にレースを進めていた。しかし中盤でハードルに対して減速してしまったことでリズムが乱れてしまい、後半の流れが崩れてしまった。中盤から後半で順位を上げることができず、結果として49秒78の8着となり準決勝進出はならなかった。過去2大会連続で準決勝進出を果たし、今回は決勝進出が目標だったために非常に残念であった。調整も順調だったこともあり、今回の結果を受け止めて来季に生かして欲しい。

2組目には小西選手が出場した。小西選手はレース中盤から後半にかけて粘り強く走るスタイルであり、前半の立ち上がりは課題でもあった。世界選手権になると前半からのレース展開がかなり速いため、前半で取り残されると後半の巻き返しが間に合わなくなることも多いことから事前に注意をしていた。この点からも、小西選手は前半からしっかりと流れをつくることができ、得意の中盤から後半につなげ粘り強く走り切ることができた。結果は6着ながら49秒58のシーズンベストと、初出場ながら持てる力を発揮することができた。予選を通過できなかったことから喜べる結果ではないが、初出場の中で持てる力を出せたことは今後のキャリアアップにつながると考えられる。今回得た自信が深まるような取り組みをして来年更なる飛躍を目指して欲しい。

松下選手は最終5組目に出場をした。松下選手は前半丁寧に入り、大きなミスなく中盤からしっかりと流れを作っていくことができた。武器である後半もリズムを乱すことなくしっかりと走りきり49秒34の4着で準決勝進出を決めた。ラストの50mで順位を上げる粘り強さが光ったレースであった。事前合宿から順調に調整を続け、出発直前の競技会で自己記録を更新した勢いそのままに初出場ながら準決勝進出を果たした。

予選ラウンドでのトップタイムは48秒37ではほぼ例年通りであったが、一番低いタイムが49秒56、タイムで拾われるプラスの記録は49秒38とこちらは例年よりも高いタイムであった(前回50秒25)。今大会は予選からハイレベルだったと言える。

続く準決勝では松下選手は3組目に出場した。世界選手権の準決勝は3組2着プラス2と厳しい通過ラインとなっているためレース展開が予選とは別物になることが多い。特に前半の流れがさらに速く、最初からかなり厳しいせめぎ合いとなる。この点を考慮して臨んだが、選手の予想以上にレースの流れが速かったため完全に自分のリズムを見失ってしまうようなレースとなってしまった。結果として51秒10の8着と全く勝負させてもらえなかった。非常に厳しい結果であったが、今回準決勝のレースを肌で感じるることができたことは松下選手を含む3人の選手にとって大きな刺激となった。今大会は準決勝の通過ラインも48秒54と、ここ10年の世界選手権や五輪では最もハイレベルであった。来年のリオデジャネイロ五輪も同様のハイレベルが予測されることから、今回の結果をしっかりと受け止めて一つの集大成である五輪での決勝進出を目指すべく強化を進めていきたい。

〈跳躍ブロック〉 跳躍部長 吉田 孝久

15回目となる世界陸上競技選手権大会が北京で開催され、大会初日には男子棒高跳の予選が行われた。これには萩田大樹選手(ミズノ)、山本聖途選手(トヨタ自動車)の2名が出場した。

萩田選手は助走路の関係でいつもよりも2歩短い18歩で試合に臨むことになった。二人とも5m40から試技を開始し、順調

にラウンドを重ねていった。勝負所と思われた5m65は萩田選手、山本選手ともにクリアし予選突破に近づいたと思ったが、試合のレベルが高く5m70を跳ばないと予選を通過できない状況となった。5m70は惜しい跳躍はあったものの、結局二人ともこの高さを跳ぶことができず、萩田選手がB組10位総合20位、山本がA組12位総合23位で予選落選という結果で終わった。

大会3日目には男子走幅跳の予選が行われ、菅井洋平選手(ミズノ)が出場した。菅井選手は大会2週間前に出場した記録会で踵を痛めてしまい試合まではほとんど走ることができない状況であった。当日は痛み止めの注射をして試合に臨んだが、ウォームアップの様子をみる限り調子は良さそうに思われた。予選通過ラインは8m15であったがこれまでの大会結果から8mを超えれば予選通過の可能性が高いと予想した。

競技が開始され、菅井選手は1回目に7m92を跳躍した。踏切ラインまで10cmほど余らしている状態だったので修正を加えていけば8mを越えることは可能だと思われた。しかし、助走が安定しないことで2回目、3回目と記録を伸ばすことができずA組5位の総合16位で予選を通過できなかった。

大会7日目には男子走高跳が行われ、戸邊直人選手(つくばツインピークス)、衛藤昂選手(AGF)、平松祐司選手(筑波大)の3名が出場した。

この種目では日本人最年少となる18歳で出場した平松選手は、練習跳躍で硬さが見られたもののオープニングの2m17を1回目にクリアした。しかし、次の2m22が跳べずB組16位の35位で終わった。

今年のアジア選手権を制した衛藤選手は、大会前の合宿でも好調で予選通過の期待が持たれたが、2m26の1回目を失敗してからリズムが崩れてしまい、2m22のA組16位総合28位で予選を通過できなかった。

2m31のベスト記録を持ち、今季も2m29を跳んでいる戸邊選手に最後の期待が持たれた。戸邊選手は練習跳躍で右腰を痛めたようで、2m26は2回目にクリアしたものの結局2m29を越えられずA組15位総合25位で予選敗退した。

今回は跳躍ブロックから6名の選手が出場したが一人も予選を突破することができなかった。しかし、個別の結果をみてみると萩田選手、山本選手は5m65を跳んでいたし、走幅跳でも菅井選手が予選通過まであと6cmだったように僅かなところで決勝進出を逃したという選手もいた。

また、決勝の成績を見ても、棒高跳は5m65、走高跳では2m25、走幅跳では7m97で8位入賞できていて、跳躍種目では予選さえ通過できれば決勝での入賞の可能性は大きくなることも確認できた。ただし、決勝は予選の翌日または2日後に行われるので、ここで戦うためには余裕をもって予選を通過するだけの力をつける必要がある。そのためには棒高跳では5m80、走高跳では2m30、走幅跳では8m15以上の自己記録が必要となろう。

来年はいよいよリオオリンピックである。ここで勝負できるように、引き続き冬期の強化合宿や欧州遠征を通じて強化を図っていきたいと思う。

〈投擲ブロック〉 投擲部長 等々力 信弘

男子やり投新井涼平選手(スズキ浜松AC)については、日本の事前トレーニングなど問題なくスケジュールを消化出来た状態で現地入りし、現地での最終調整トレーニングでも好調で、大会では非常に良い結果が期待出来る動きを見せており、今回大会には8位入賞、試合の流れでメダル獲得を目標にのぞみましたが、決勝のベスト8通過記録が過去2番目に高い大会であった事もあり、残念ながら決勝83m07で9位の結果でした。試合

内容は、予選1投目、2投目、3投目に84m66をマークし、決勝に進みました。決勝では、1投目、2投目、3投目ファールで9位の結果でした。

予選、決勝ともに試合中コーチからの指示に対してポイントの修正も出ており決勝の3投目はファールではあったが85mを越える投げを見せるなど、決勝の場でも十分に戦っていました。

今回初の世界陸上出場である事などを考えると十分に持っている力は発揮した結果であったように思えます。今回世界の場で戦った経験を今後のトレーニングにいかし、来年のリオでの活躍を期待したいと思います。

海老原有希選手（スズキ浜松AC）については、日本選手権後に十分なトレーニングが出来なかった時期があり大会に向けて、少し心配な面がありましたが、大会時には問題無いレベルまで体調を戻しており、決勝進出を目標に出場しましたが、試合内容は、予選1投目、2投目、3投目で組9位、全体で19位の結果でした。1投目の失敗から試合中の修正も上手くでき、今回世界大会では初の60m台の記録をマーク出来ている事から1投目の失敗が非常に悔やまれますが、新井選手同様に持てる力は発揮できた大会であったと思います。

〈混成ブロック〉 混成部長 本田 陽

今回、右代啓祐選手（スズキ浜松AC）20位（7532点）、中村明彦選手（スズキ浜松AC）16位（7745点）と結果的には目標を達成する事が出来なかったが、今回の試合後の各選手のコメントから今後の明確な課題を感じ取っている事は次に繋がる大切なポイントであると考えている。右代選手に関しては、良くなるうとこだわっている種目や考え方が全体を引っ張っている状況なので、もう一度基本とは何か？という点を本人及び関わっているスタッフ一同集まって意見を交わし、年内は、よりシンプルな状況をつくり、徹底的に基礎的なトレーニング計画を立てて実施していきたい。今回の怪我もその延長にあるのでまずは、しっかりと治療を行い、万全な状態で冬季練習をスタートしたい。中村選手は、今回の世界選手権では、疲労の回復が遅れ、ピークを持ってくる事が出来なかったが、十種初代表の中で、緊張との戦いもあったが、中盤以降はしっかり自分のペースで試合を進める事ができた。右代選手の存在も大きく、複数出場は大変メリットがあったと思う。来年に向けて、今付いた順位を国際試合毎に上げられるようにしていきたい。

右代選手は、入賞ライン、オリンピック参加標準を目指した目標設定をした。結果として、2種目目の捻挫及び踵の傷害により、思うような試合を進める事が出来なかった。やり投でも強引に投げたことにより背中を痛めた。投擲2種目（砲丸・円盤）と1500mは何とかまとめる事ができたが、今回は故障だけが要因ではない。ロンドンオリンピック後も同じような状況があったが、本人が、記録を伸ばすために、独自に始めたトレーニング（今回はスプリント&棒高跳）にこだわりすぎて、基本的なポイントが整理出来てない状況であると思う。また、マスメディアに対しても、アピールする事は必要であるが、本人の現状と発言との間に差があることが気になっている。しかし、あの身体の状態特に2日目は痛みで力が入らなかったが最後までしっかり工夫しながら試合を行え、まとめられたことは良かった。

中村選手は、得意種目をしっかり勝負出来るように仕上げていった。まずは世界の立ち位置を確認し、ひとつでも上順位を上げられる試合を目指した。初日、かなりの緊張がみられ前半3種目は下限設定の記録に終わったが、走高跳からは本来の動きが戻り、400mも良い形で終えることが出来た。2日目のハー

ドルは1台目まで8歩から7歩に変更。記録会、練習等で準備をして来たが、スタートで体が立ってしまい、記録に結びつけられなかった。しかし、この挑戦は継続していきたいと思う。円盤、棒高跳は記録には結び付かなかったが、内容は非常に良く走高跳以降7種目は、自分のペースで試合を進める事ができた。今回、全てスプリント種目が一番早い組（イトン等と同組）であったためもうひとつ前くらいの組であれば余裕を持って試合を行う事が出来たと思うが、今後専門種目の選手達と合同練習をする等対策を立てていきたい。

〈男子長距離・マラソングロック〉

男子長距離・マラソン部長 宗 猛

【男子マラソン】

8月18日（火）到北京空港へ降り立った時には、日本に比べて涼しい印象を受けましたが、21日には、30℃以上に気温が上がり、翌日の男子マラソンスタート時の気象コンディションを予測させるものとなった。当日の8月22日（土）は、朝5時30分にホテルを出発し6時15分にスタート地点に到着。スタート地点の気温は、26℃・湿度48%でしたがスタート時には陽が差し込み、更に暑くなる予感があった。

2008年の北京五輪とはほぼ同じコースでワンウェイとなるこのコースは高低差もあまりありません。レースは予定通り、7時35分にスタートしました。

レースは、入りの5キロが16分9秒とかなりのスローペースで、優勝したケブレスラシエ（エリトリア）やツェゲイ（エチオピア）、前回の世界選手権者であるウガンダのキプロティチら50人以上の集団で推移しました。

途中、バトオチル（モンゴル）やメウッチ（イタリア）が集団から飛び出し先頭グループを引き離す場面もあったが、それぞれすぐに集団に飲み込まれ、暑さのためか、スローペースのまま我慢レースが続いた。

体感的には、気温、湿度もあがり日差しがきつくなってきた10km過ぎて前田和浩選手（九電工）が集団から遅れだした。先頭集団は、そのまま20kmを1時間3分23秒で通過し、藤原正和選手（Honda）も集団の後方で粘ってはいたが、その後徐々に離れていく展開となった。

二人とも、後半は動きが悪くならずと遅れ藤原選手が21分2時間21分06秒、前田選手が40分2時間32分49秒という結果となった。これにより、1999年のスペイン・セビリア大会からの連続入賞を逃してしまった。

今回、大会直前に今井正人選手（トヨタ九州）が髄膜炎で欠場となった。藤原選手と前田選手ともに大会に合わせて『順調に練習が行えた』と報告を受けていたが、選手・専任コーチの考えている以上に疲労が残っていたのかもしれない。そのため、北京の暑さに対応できずに中盤で失速してしまった。夏場のマラソン練習の難しさを再認識させられた。

リオデジャネイロ五輪に向けては、医事委員会・科学委員会とタイアップしながら今まで以上にメディカルチェック等を有効に使い体調管理を考えたい。

勢いのある若い選手がマラソンに挑戦することで、ベテランの選手を含めた日本マラソン界の層を今以上に厚くして、この流れを変えてくれることを期待したい。

【結果】

- 1 Ghirmay Ghebreslassie ERI 2 : 12 : 28
- 2 Yemane Tsegay ETH 2 : 13 : 08 SB
- 3 Munyo Solomon Mutai UGA 2 : 13 : 30
- 4 Ruggero Pertile ITA 2 : 14 : 23 SB
- 5 Shumi Dechasa BRN 2 : 14 : 36

- 6 Stephen Kiprotich UGA 2 : 14 : 43
- 7 Lelisa Desisa ETH 2 : 14 : 54
- 8 Daniele Meucci ITA 2 : 14 : 54
- ...
- 21 Masakazu Fujiwara JPN 2 : 21 : 06 SB
- 40 Kazuhiro Maeda JPN 2 : 32 : 49

【男子10000m】

20時50分と比較的遅い時間でのスタートとなった男子10000m。スタート前は、暑さをあまり感じなかったが、走り始めると蒸し暑い感覚が強くなったと選手は口にしていた。

スタートから、村山謙太選手（旭化成）が、2番手の位置につけ入りの1000mを2分51秒とスローな展開と思ったが、すぐにペースが上がり400mを64秒前後で進み始める。すぐに村山選手が遅れはじめ、中盤にいた設楽悠太選手（Honda）と並走。集団の後方には鎧坂哲哉選手（旭化成）という位置取りでレースを進めるも、ペースアップに対応できずに村山選手、設楽選手、鎧坂選手の順で離れてしまった。体調はまずまずだったが、大会の雰囲気にもまれてしまったのか全く良いところが無いレースだった。

その後も世界トップの走りは、淡々と2分40前後のラップを刻むが、日本人選手は普段の自分の走りを出すこともできず、次々と周回遅れになっていく。それでも、鎧坂選手は、第3集団後方で我慢し4000mあたりで給水をとるが、いいところを出せず、28分25秒77の18位。

村山選手は22位で29分50秒22、設楽選手は30分08秒35と先頭から2周遅れでのゴールとなった。

日本でも活躍しているBedan Karoki選手（KEN）、ナイキオレゴンプロジェクトで活動するGalen Rupp選手（USA）が、この決勝の舞台でシーズンベストの記録を出している。激しい揺さぶりがある大会も、タイム的にはシーズンベストで走れば日本人選手でも入賞の可能性は有る。トレーニング面の工夫とメンタル面強化を皆で考えたい。

【結果】

- 1 Mohamed Farah GBR 27 : 01. 13
- 2 Geoffrey Kipsang Kamworor KEN 27 : 01. 76
- 3 Paul Kipngetich TanuiKEN 27 : 02. 83
- 4 Bedan Karoki Muchiri KEN 27 : 04. 77 SB
- 5 Galen Rupp USA 27 : 08. 91 SB
- 6 Abrar Osman ERI 27 : 43. 21
- 7 Ali Kaya TUR 27 : 43. 69
- 8 Timothy Toroitich UGA 27 : 44. 90
- ...
- 18 Tetsuya Yoroizaka JPN 28 : 25. 77
- 22 Kenta Murayama JPN 29 : 50. 22
- 23 Yuta Shitara JPN 30 : 08. 35

【ラップ】

- 18位 鎧坂哲哉（旭化成）
13 : 52. 81
28 : 25. 77 (14. 32. 96)
- 22位 村山謙太（旭化成）
14 : 39. 82
29 : 50. 22 (15. 10. 40)
- 23位 設楽悠太（Honda）
14 : 33. 54
30 : 08. 35 (15. 34. 81)

【男子5000m】

午前中のセッションとなり、9時35分スタート。1組目は、米国に活動拠点を移し、トラック競技に専念している大迫傑選手（NIKE OREGON PROJECT）。1組目ということもあり、ひとり飛びだしたStuart Banda選手（マラウイ）を除き、2番手グループは1000mを2分53秒とスローな展開であった。大迫選手も集団の中位につけ、余裕のある走りに見えた。2000mで先頭の選手がグループに吸収されるが、ペースは上がらず3000mを8分38秒で通過。ここから、ペースが上がり、各選手がそれぞれ位置取りでぶつかり合いながらレースが進み、大迫選手も集団の外側で、常にレースの動きを見ながら走る。3000mから4000mを2分35秒にペースを上げるが、大迫選手はそのペースについていく。最後の直線100mまで集団に残ってペースアップにも対応したが、先頭のHagos Gebrhiwet選手（エチオピア）から0.82秒差の7位（13分45秒82）と予選通過はならなかった。非常に惜しいレースであり、大迫選手自身も、最後の位置取りで負けたと、レース自体はしっかり見ながら走れたという感じであった。最後の4000mから5000mは2分32秒までペースが上がっていたことを考えると、決勝に残れなかった事が悔やまれる。

続く2組目には、村山絃太選手（旭化成）。1組目のスローな展開とは違い、入りの1000mを2分43秒、2000mを5分27秒と進む。村山選手も2000m付近まで集団の後方につけるが、グループが、次の1000mを更にペースを上げて2分40秒となったところで、ペースに着いていけず15秒ほど離される。その後も、ペースを上げられずに14分07秒11の17位となった。初めての世界選手権出場となったが、1組目で健闘した大迫選手とは対照的なレースとなった。

現在米国を拠点とした大迫選手は、海外選手とのレースに慣れていて、上手くレースに対応した。反面、村山選手はレースの雰囲気に飲まれてしまった感があるが、日本でもケニアを含めた他国の代表選手を受け入れて活動、レースにも積極的に参加していることを考えると、一概には言い切れないであろうと考える。今回のレースは、選手個人の目指す所、意識に差があったのではないと思う。弱冠24歳の大迫選手、22歳の村山選手はこのレースを糧に、2016年のリオデジャネイロオリンピックはもとより、世界での活躍を目指して更に成長をしていって欲しいと考えます。

【結果】

■1組

- 1 Hagos Gebrhiwet ETH 13 : 45. 00 Q
- 2 Ben True USA 13 : 45. 09 Q
- 3 Edwin Cheruiyot Soi KEN 13 : 45. 28 Q
- 4 Tom Farrell GBR 13 : 45. 29 Q
- 5 Imane Merga ETH 13 : 45. 41 Q
- ...
- 7 Suguru Osako JPN 13 : 45. 82

■2組

- 1 Yomif Kejelcha ETH 13 : 19. 38 Q
- 2 Mohamed Farah GBR 13 : 19. 44 Q
- 3 Mohammed Ahmed CAN 13 : 19. 58 Q SB
- 4 Caleb Mwangangi Ndiku KEN 13 : 19. 58 Q SB
- 5 Albert Kibichii Rop BRN 13 : 19. 61 Q
- 6 Ryan Hill USA 13 : 19. 67 q
- 7 Richard Ringer GER 13 : 19. 84 q
- 8 Galen Rupp USA 13 : 20. 78 q
- 9 Ali Kaya TUR 13 : 21. 46 q

10 Isiah Kiplangat Koech KEN 13 : 23. 51 q

…

17 Kota Murayama JPN 14 : 07. 11

〈女子長距離・マラソンプロック〉

女子長距離・マラソン部長 武富 豊

女子長距離種目（5000m・10000m）では厳しい目標にはなるが入賞1、女子マラソンではメダルを含む複数入賞を目標にして臨んだが、マラソンで伊藤舞選手（大塚製薬）の7位入賞だけと言う厳しい結果に終わった。

【10000m】

西原加純選手（ヤマダ電機）、高島由香選手（デンソー）、小原怜選手（天満屋）の3名が出場。参加標準記録（32'00"）をやっと突破した3名には世界のトップレベルの選手との実力差は明らかで、積極的にレースメイクを行い前半の5000m通過を15'50"に目標を絞って、高島選手、小原選手の両名が交互に引っ張り、下位入賞を狙ったが、経験の少ない両名は1周につき1"～2"遅く5000mの通過が16'11"となり殆どの選手にとって楽なペースとなり、6000m過ぎのペースアップに対応出来ずに終わった。西原選手はアジア大会での経験から中断でのレースに終始し後半のペースアップに備えたが対応出来なかった。10000mではモスクワ大会の8位入賞が31'34"8、今回の8位入賞が31'51"3と落ちている事からすれば、3名共入賞のチャンスがあっただけに悔やまれる。

今大会の結果を踏まえリオ五輪までに31'20"～30"の実績を付ける事を目標に取り組みれば、この種目での入賞は可能だけに更なる努力を期待したい。

結果：西原選手32'12"95（13位）、高島選手32'27"79（20位）、小原選手32'47"74（22位）

【5000m】

尾西美咲選手（積水化学）、鈴木亜由子選手（日本郵政グループ）、鷺見梓沙選手（ユニバーサルエンターテインメント）の3名が出場。出場者のランキングからも先ずは予選通過を目標にした。予選1組に出場した尾西選手は、モスクワ大会の失敗から自己ベストに近いタイムを出さないと落選する可能性があるスタートから積極的にレースを引っ張る決意で予選に臨み、見事6位（15'33"84）で予選を通過。2組目には鈴木選手と鷺見選手が出場、スタートから鷺見選手が前に出るが誰も追わずスローペースになった。2000m手前から鈴木選手が飛び出し、3000mの通過では1組目を上回るタイムで通過し予選通過を確実にした。最後はペースダウンし2組目の6位だったものの、決勝で入賞の可能性を期待できる内容だった。鷺見選手は出場決定後に少し足を痛め調整が遅れた事が響き落選したが、社会人1年目での代表入りし、大舞台でスタートから先頭を走った経験を次に生かして欲しい。

決勝でも尾西選手が1000mまで先頭に立ち、次に鈴木選手が2000mまで先頭で引っ張り、ケニア・エチオピア勢を含む争いに持ち込んだが、エチオピア勢の急激なペースアップに対応出来ず、後方で追い上げて来たクイケン選手（オランダ）と僅か0.29"及ばず9位になった鈴木選手の粘り強い走りは今後期待出来る内容だった。優勝したアヤナ選手（エチオピア）の後半3000mは8'20"を切るレース内容から、女子5000mも13'台突入の時代を予感させられた。

結果：鈴木選手15'08"29（9位）自己新

尾西選手15'29"63（14位）

鷺見選手16'13"65（予選落選）

〈競歩ブロック〉

競歩部長 今村 文男

今大会のブロック目標として、男子競歩にてメダル2入賞2を掲げた。その目標を達成するためにブロックの取り組みとして、7月上旬まで個別の強化を優先させ、7月10日以降は、世界陸上代表が北海道千歳市を強化拠点にして、ブロック強化事業と個人強化合宿を連動させながら個別目標を達成するために所属先の垣根を取り払い一体感のある強化を行った。また、医事・科学委員会と連携を図り、個々のコンディショニングチェックや暑熱対策を行いながら世界陸上へ準備を進めてきた。種目ごとに総括すると、男子20km競歩は3名が出場し、メダル獲得が期待された鈴木雄介選手（富士通）は、大会直前に悪化した恥骨部の痛みの影響で11kmにて途中棄権、高橋英輝選手（富士通）は、14km地点まで先頭集団でメダル争いをするも、ここから大幅にペースダウンし、順位を落として47位でフィニッシュした。藤澤勇選手（ALSOK）もラスト1kmまで入賞争いをして残りが残り200mで胃痛が起こり順位を落とし13位でフィニッシュした。この種目において目標としていたメダル獲得を果たすことができなかった。特に、メダル候補であった鈴木選手の途中棄権については、3月のアジア選手権競歩大会（石川県能美市）において世界記録をマークし、その後の取材対応等で世界陸上へ向けた強化準備の遅れやその遅れを取り戻そうと強化を推し進めていく中で股関節周囲に発生した疼痛を軽視し、強化練習を優先させた結果が途中棄権につながったと考える。今後は、初期段階の疼痛であっても帯同ドクターやトレーナーなど医療スタッフへの報告、連絡、相談を怠らざる確かな指示や対応を頂けるように指導体制を見直したい。

一方、男子50km競歩においては、谷井孝行選手（自衛隊体育学校）が世界選手権、オリンピックなどの主要国際大会における日本競歩史上初の銅メダルを獲得、荒井広宙選手（自衛隊体育学校）も44km地点まで谷井選手と激しいメダル争いを繰り広げるもあと一歩、力及ばず4位となった。山崎勇喜選手（自衛隊体育学校）も30kmまでは入賞圏内でレースを進めていたが疲労の影響で歩型が乱れ累積のレッドカードが2枚となり、レース後半は思うようにペースを上げることができず順位を落として34位であった。

今回、メダルを獲得できた要因として、スタートリストの自己記録を比較すると上位選手は拮抗していたので歩型が安定している谷井選手や荒井選手は、常に先頭集団で積極的なレースができたこと、序盤からの駆け引きやペース変動に対応していたことやレース前およびレース中の脱水や熱疲労などを最小限にとどめるなど暑熱対策が万全であったことが今回の成果につながったと感じている。

また、女子20km競歩に出場した岡田久美子選手（ビックカメラ）は、暑さを考慮して、入賞を狙える位置で粘るレースを目指したが、思うように前が落ちて来なかったため、なかなか順位を上げられず、25位と地力の差を痛感させられた。岡田選手については、トラックレースにおける5000mや10000mの自己記録は、ロシア、中国などの強豪国の選手と同等であるが、主要国際大会の経験が少ないため、レース後半に暑さでペースダウンする選手を追い抜けると安易に考えていたため積極性に欠けたレース展開となった。

近年の男女20km競歩は、いかに先頭集団にいながら、ペース変化への対応やレース後半のペースアップが順位を上げるポイントになっている。よって、今後の課題としては、レース後半におけるペースアップ能力を高めるために体力要因となる持久力や筋力を高めることなどが挙げられる。そして、海外で行われるレースに積極的に出場し、現状の課題を確認しながら国際競技力の向上を図って欲しい。

第23回日・中・韓ジュニア交流競技会報告

日本選手団監督 村田 勇

日時：2015年8月22日(土)～29日(土)

場所：大韓民国・済州特別自治道

日程

- ・8月22日 日本選手団集合(前泊宿舎:東横イン 中部国際空港本館)指導者ミーティング
- ・8月23日 出発移動(中部国際空港発 → 済州国際空港着)
- ・8月24日 練習(済州総合競技場)・競技別指導者ミーティング・開会式
- ・8月25日 練習(済州総合競技場)
- ・8月26日 大会1日目<第1戦>(済州総合競技場)
- ・8月27日 大会2日目<第2戦>(済州総合競技場)
- ・8月28日 文化行事参加・文化探訪・フレンドシップ交流
- ・8月29日 帰国(済州国際空港発 → 中部国際空港着)解散

場所 滞在先宿舎：SKYPARK HOTEL

大会会場：済州総合競技場

選手団 正式役員3名、帯同コーチ3名

選手男子11名、女子11名

選手選考

例年同様、全国高校総体での上位入賞者を中心に選手を選考した。例年とおり日本体育協会には、陸上は全国高校総体まで待ってもらい手続きを進めたが、パスポートを全国高校総体後に取得する選手が多くなり、提出書類等の一部に関してはぎりぎりの提出であった。今後も選考として陸上競技は公平性を重視し全国高校総体の上位者で選考していく方針であるが、海外の大会の場合は有力選手の顧問には、事前(高校総体前)にパスポートの準備をしてもらう事を更に周知していきたい。

今回の選手は例年以上に全国高校総体での優勝者や世界ユース陸上競技選手権大会等に出場した選手も多く、今回のチームJAPANは様々な面で安定感のある選手団となった。

選手村(宿舎)

中国、韓国の選手と別のホテルに滞在していたため、日頃の生活の中での接点は殆どなかった。その点は交流大会の意義としてはもったいない気がした。

食事については、buffetの品数等もそれなりにあり、味についても美味しく問題がなく、通常の国際大会と比較してもなんのストレスもなかった。

また、ホテルは一部屋に2～3名で配宿されたが、日本のホテルと遜色はなく快適に過ごす事ができたが、ホテル専用のランドリーが3台だけしかなく、250名からの日本選手団が宿泊しているため、使用が難しくホテルから近くのコインランドリーで洗濯をする選手が多かった。毎日のミーティングについては、陸上選手団の部屋の階のエレベーターと廊下スペースで行ったが、大きな問題もなく行なえた。

ホテルは繁華街に位置しており、セブンイレブンや他のコンビニ等も近くにあり、ほぼ日本と同じ感覚で過ごす事ができた。

輸送・移動

中部国際空港からの出発は日本選手団専用のチャーター機での移動であったが、積載貨物重量オーバーのため、予定のフライト時刻より約90分の遅れで出発した。重量オーバーを補うため燃料を抜く作業に時間を要したとの事であった。海外や飛行機の移動は予定時刻とおり行かない事もあり、選手にとっては良い経験となったと思う。東横インホテルを10:30分に出発して済州島のホテルに着いたのが20時を過ぎていた。地図上では済州島は日本から近いが、他競技を含めた日本選手団で移動するため、ほぼ丸1日を要しての移動であった。

現地でのホテルと競技場の輸送については、陸上競技日本チーム専用の大型バス1台を用意して頂き、競技場までは3.4km 約10分の距離で、基本的には日本選手団の要望に合わせた時間で運行してもらえたため、大きなストレス無く快適に移動できた。

成績

出発前のミーティングでは、「素晴らしいメンバーが揃った。日本代表としての喜びと誇りを持ってチームJAPANとして取り組んで行こう。また、この大会をおして何でも良いから今後の競技人生に大きくプラスとなるような「きっかけ」を持って帰ろう」と話し、それぞれ課題を持って臨むことを伝えた。また、選手同士でキャプテンを決めてもらい、男子は100mの大嶋健太選手(東京高校3年)と女子はやり投の北口榛花選手(旭川東高校3年)で今回のチームJAPANがスタートした。また、大会前夜のミーティングでは、自分の長所(良さ・武器)を十分に発揮できるように取り組む事を伝えた。

大会としては、同じタイムテーブル、同じ番組編成で2回行うという特殊な大会であった。高校総体や各チームでの合宿を終えた後で、コンディショニングの面で難しい時期ではあったが、各選手とも大会に向けてのモチベーションは高く、高い集中力を持って臨めた選手が多かった。また、中山桂団長をはじめとするコーチ・スタッフ陣は通常の国際大会より少ない6名ではあったが、それぞれの役割分担を明確にして選手のサポートに努め、選手とスタッフ陣がとても良好な関係を持つことができた。

トラック種目は2試合とも圧勝したが、フィールド種目については、韓国・中国チームの活躍が目立った。特に好成績を挙げた選手は、男子

では200mの大塚渉選手(浜名高校3年)が第2戦目でスタート直後が向かい風の中、20秒96(-0.5)のセカンドベスト記録で第1戦に続き優勝を果たし、1500mの田母神一喜選手(学法石川高校3年)が2試合とも好記録で圧勝し、やり投の長沼元(高田高校3年)は2試合とも1投目にセカンドベスト記録の67m台をマークする試合運びをした。女子では走高跳の石岡柚季選手(東北3年)が2試合とも安定した力を発揮し、第2戦目ではパーソナルベスト記録となる1m79で優勝を果たした。円盤投の郡菜々佳選手(東大阪大敬愛高校3年)は2試合とも47m台をマークして優勝を果たした。7月の世界ユース陸上競技選手権大会のやり投で優勝を果たした北口榛花選手は、思うような投げができないままだったが、第2戦の最終投擲の6回目で本人も納得の行く投げをして優勝を果たした。その他の選手も含め全体的には、調整が難しいこの時期としては良いパフォーマンスを発揮した。

大会運営自体は日本と大きく変わらず、選手は試合に集中できた。初めての海外での試合をした選手も多く、多くの事を学び、感じる事ができた大会となった。フレンドシップ交流

一昨年の中国大会、昨年の日本岩手大会は、各国から2～3競技が代表として、歌やダンス等を披露する交流会であったが、今回は選手が全員参加の人文字作りで交流を図ろうとしていた様だが、主催国の韓国の思惑とは裏腹にフレンドシップ交流としては物足りない催しとなってしまった。ただ、陸上競技では、試合後、選手同士でプレゼント交換や記念撮影、手振り身振りの怪しい英語で交流を図ったり、中にはスマートフォン(翻訳ツール)アプリを駆使してコミュニケーションを図った選手もいた。いずれの選手も語学力の重要性を感じ取ったようであった。国は違っても同じ世代の若者同士。笑顔ですくもお互いを認め合いコミュニケーションを図る様子は、大変に心温まるもので、選手自身の大きな財産となると確信をしている。

最後に

陸上競技担当のボランティア通訳の金英孝さんと金起賢さんには、一週間にわたり献身的にご協力を頂き、不自由なく過ごす事ができた。地元のボランティア通訳の人の達との交流もこの競技会の大きな意味を成しており、大変に感謝したい。

最後に今回の貴重な経験を参加選手一同が今後のそれぞれのステージに繋げていくことを祈念して報告とします。

※リザルトはこちら → <http://www.jaaf.or.jp/taikai/1314/>

第23回日・韓・中ジュニア交流競技会 代表選手・役員一覧

区 分	出場種目	ふりがな		性別	所属
		氏 名	姓 名		
1 団 長		なかやま かつら	中山 桂	男	日本陸上競技連盟理事
2 監 督		むらた いさむ	村田 勇	男	群馬県立太田東高等学校
3 コーチ		ひょうどう しのぶ	兵頭 重徳	男	高知県立高知工業高等学校
4 コーチ		とみやま あさよ	富山 朝代	女	東大阪大学敬愛高等学校
5 マネージャー		ひらふす かし	平井 伸	男	大分県立大分南高等学校
6 トレーナー		まつお しんのすけ	松尾 信之介	男	大阪学院大学
7 選 手	100m / 400mR	おむら げんた	大島 健太	男	東京高等学校3年
8 選 手	200m / 400mR	いぬづか わたる	大塚 渉	男	静岡県立浜名高等学校3年
9 選 手	400m / 400mR	ふなと だいすけ	船山 大輔	男	東福岡高等学校3年
10 選 手	1500m	たなか かつし	田中 一貴	男	学校法人石川高等学校3年
11 選 手	110mH / 400mR	かない なお	金井 直	男	川崎市立橋高等学校3年
12 選 手	走高跳	いいたあゆ	藤田 凌太郎	男	関西大学北陽高等学校3年
13 選 手	走幅跳 / 400mR	あだち かずま	足達 一馬	男	大阪桐蔭高等学校3年
14 選 手	三段跳 / 走幅跳 / 400mR	いながわ しょうた	稲川 尚次	男	新潟県立新潟高等学校3年
15 選 手	砲丸投 / 円盤投	しもさか けい	下坂 啓	男	香川県立大村高等学校3年
16 選 手	円盤投 / 砲丸投	とびまつ さとし	飛松 聡	男	九州産業大学付属九州産業高等学校3年
17 選 手	やり投	なかゆき げん	中野 元	男	岩手県立高田高等学校3年
18 選 手	100m / 400mR	えどべい いよば	江藤 伊予	女	東京高等学校3年
19 選 手	200m / 400mR	かわむら たもみ	川村 唯	女	岩手県立盛岡第一高等学校3年
20 選 手	400m / 400mR	うすまき ゆうな	上杉 悠菜	女	大阪府立枚方高等学校2年
21 選 手	800m	いけいさ あいり	池崎 愛里	女	広島市立舟入高等学校2年
22 選 手	1500m	たなか のぞみ	田中 希美	女	兵庫県立西脇工業高等学校1年
23 選 手	100mH / 400mR	ささき てん	佐々木 天	女	岩手県立盛岡第一高等学校3年
24 選 手	走高跳 / 400mR	しんおか ちずさ	新岡 智紗	女	東北高等学校3年
25 選 手	走幅跳 / 400mR	たけうち けい	滝内 圭弥	女	大阪府立摂津高等学校2年
26 選 手	砲丸投 / 円盤投	こおり 菜々佳	小栗 菜々佳	女	東大阪大学敬愛高等学校3年
27 選 手	円盤投 / 砲丸投	いづみ 利枝	伊藤 利枝	女	福本国府高等学校3年
28 選 手	やり投	きたぐち はるか	北口 榛花	女	北海道立旭川東高等学校3年

インターハイにおける科学委員会研究活動報告

科学委員 小山 宏之

1. 活動概要

2015年7月29日から8月2日までの5日間にわたり、近畿総体（第68回全国高等学校陸上競技対校選手権大会）が和歌山県和歌山市・紀三井寺公園陸上競技場を会場として開催されました。各地区大会を勝ち抜いた高校生トップアスリートが和歌山に集結し、2つのジュニア日本新および高校新、9つの大会新が出るなど、例年以上とも思われる熱戦が繰り広げられました。

科学委員会では、インターハイに出場する高校生競技者を対象として、「バイオメカニクスデータの収集」および「体調・食生活・心身の状況、スポーツ障害及びサプリメント摂取に関する調査」を実施しました。この活動は第46回大会以来、主催者の皆様をはじめ関係者様の多大なご協力を得まして、毎年継続して実施しています。インターハイで収集したデータは、日本陸上競技連盟のホームページ、毎年発行の陸連紀要（日本陸上競技連盟ホームページで閲覧可能）、陸上競技マガジン等での公表が主でしたが、昨年度から各地区の高体連合宿における指導者への研修会、オリンピック育成競技者研修合宿における競技者への講義等において、測定データから得られる知見を説明しました。研修会等で提示した知見は、特定選手の高校時代からシニアまでの縦断的分析データ、高校生からシニア選手までを横断的に分析したデータから得られたものであり、シニア期を見据えたジュニア期の指導を考える知見を提示していくには、インターハイにおける科学的データの取得が必要不可欠であると考えられます。今年度は、高校生の現状を広く捉えて伝えていくために測定対象を従来よりも拡充しての活動を実施しました。測定データの一部は、今年度も実施される講習会においても提示していく予定であります。

2. 活動メンバーについて

今年度の活動は、科学委員会スタッフ16名で実施しました。活動班員は短距離・障害、中長距離、跳躍、投擲の4班に分かれ、それぞれの種目について活動を行い、必要に応じて班を跨いでサポートする体制を整えて進めました。なお活動は科学委員会指定のビブスを着用して活動を行いました。

各種目の活動班員は以下の通りです。

<短距離・障害担当> 貴嶋孝太（種目主任）、柳谷登志雄、福田厚治、柴山一仁、山元康平、安藤柗之介

<中長距離担当> 榎本靖士（種目主任）、杉本和那美

<跳躍担当> 小山宏之（幹事、種目主任）、村木有也、清水悠、柴田篤志

<投擲担当> 高松潤二（種目主任）、山本大輔、中村力、伊瀬知優翔

3. 活動内容

科学委員会研究活動は、主に以下の2点でした。

- (1) バイオメカニクスデータの収集
- (2) 「体調・食生活・心身の状況、スポーツ障害及びサプリメント摂取に関する調査」質問紙の配布

大会期間中のカメラ等機材の保管、コンピューター機器を用いた分析のために、メインスタンド裏の会議室を科学委員会に提供して頂き活動を行いました。

3-1 データの収集について

「バイオメカニクスデータの収集」は、ビデオ映像によるデータの収集と分析、レーザー式スピード測定器（以下、ラベグ）を用いた疾走スピード変化の測定を行いました。

ビデオ映像のデータは、主にハイスピードビデオカメラを用いて、動作分析用映像および疾走スピード分析用映像をスタンドまたはグラウンドレベルから撮影しました。疾走スピード変化の測定は跳躍種目を中心に、助走路前方スタンドにラベグを設置し行いました。それぞれの撮影に必要なとなるキャリブレーション作業は競技の前後に行う許可を頂き、現場審判の先生方の協力のもと実施しました。

質問紙調査の配布は、各種目で8位以内に入賞した競技者を対象に質問用紙を配布しました。昨年度までは栄養、障害、サプリメントの摂取等に関する質問項目を主としていましたが、今年度から幼少年期における運動経験、幼少期の運動能力等の質問項目を新たに加え、種目選択に至る過程に関する情報も調査対象としました。質問紙は直接回答を書き込める質問紙と返信用封筒を表彰者召集所で配布し、日本陸上競技連盟宛に送付して頂く形をとっています。

3-2 データフィードバックについて

大会期間内におけるデータフィードバックとして、最終日を除く全ての種目においてビデオカメラ映像から作成した連続（分解）写真（図1）を作成しました。トラック競技では、レース分析としてビデオ映像から通過タイムおよびタッチダウンタイムを読み取り、スピード変化を表すグラフおよび数値を示す表を作成しました（表1）。フィールド種目については、跳躍種目では助走スピードの変化を表すグラフを、投擲種目では投擲物のリリース速度、リリース角度等のリリースパラメータに関する図表を作成しました。データ分析はデータ取得後速やかに行い、遅くとも翌日には掲示板にデータの提示を行いました。

今年度は科学委員会分析データ用掲示板を正面入口階段横に用意して頂きました。選手およびコーチ、観客等

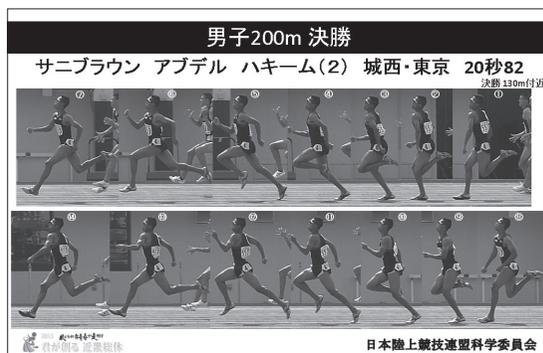


図1 連続（分解）写真の例（男子200m決勝）

が通行する地点であり、多くの方が写真等でデータを持ち帰る姿を目にしました。さらに、2枚の掲示板を用意して頂いたためフィードバック用のスペースが広く、大会期間中を通じて全ての種目(4日目まで)のデータを確認できる場を提供することができました。なお、各種目の優勝者には、選手および指導者の要望に応じて測定データの提供も行いました。

4. バイオメカニクスデータについて

インターハイでのバイオメカニクスデータ分析はほぼ全ての種目で実施しました。最終日の種目については大会終了後に分析を行いまともてています。実施種目の一部は詳細なデータ分析を加え「陸上競技マガジン」において、パフォーマンスの解説を行う予定となっています(11月号、12月号)。ここでは、大会期間中に掲示したデータの一部を紹介しします。

図2は大会記録に迫る好記録となった男子走幅跳の助走スピード結果について、大会期間中に掲示したものを示しています。走幅跳では助走で高いスピードを獲得することは必要不可欠であり、好記録であった上位2選手の跳躍を見ると直感的にスピードが高いことが予想できました。実際に分析結果を見ると、上位2選手は入賞選手の中で高いスピードを獲得していたことが確認できるとともに、選手ごとの具体的な差を把握することができます。一方で、シニアトップ選手との比較では、スピードの観点から見た開きがあることが確認できます。各種目の結果では、インターハイ入賞選手だけでなく、国内トップ選手をはじめとする過去の測定結果も

合わせて提示し、ジュニアからシニアに向けて改善すべき課題の一部が検討できる形を念頭に分析結果の公表を行いました。

5. まとめ

和歌山インターハイにおけるバイオメカニクスデータの全ては、日本陸上競技連盟ホームページ内の科学委員会ページ (<http://www.jaaf.or.jp/t-f/>) からダウンロードが可能となっています。このページでは、過去のインターハイデータ(2007年佐賀IHから掲載)に加え、科学委員会の他の活動で得られた結果も閲覧可能となっています。

最後に、科学委員会による活動の実施にあたり、ご協力・ご尽力を頂きました関係各所の皆様に心よりお礼申し上げます。

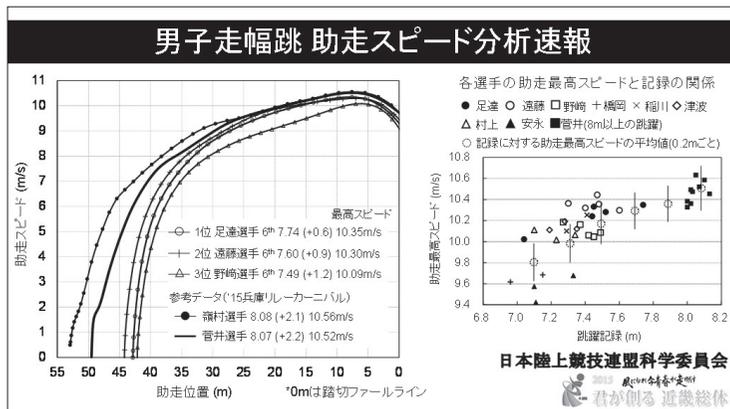


図2 男子走幅跳助走スピード分析結果

表1 タイム分析結果一例(男子200m決勝)

男子200m 決勝 レース分析速報														
順位	レーン	上段:選手名 下段:所属	記録 (秒)	通過タイム(秒)	0 -55m 区間	55m 地点	55 -100m 区間	100m 地点	100 -149.42m 区間	149.42m 地点	149.42 -200m 区間	200m 地点	最高 スピード (m/秒)	出現 区間 (区間)
1	4	サニブラウン・A ・ノキーム	20.82	通過タイム(秒)		6.41		10.68		15.52		20.82	10.53	55-100
		区間タイム(秒)		6.41	4.28	4.84	5.30							
		城西(2)東京		スピード(m/秒)	8.59	10.53	10.22	9.54						
2	6	山下 潤	21.21	通過タイム(秒)		6.48		10.79		15.70		21.21	10.45	55-100
		区間タイム(秒)		6.48	4.30	4.92	5.51							
		福島(3)福島		スピード(m/秒)	8.49	10.45	10.05	9.18						
3	7	犬塚 渉	21.25	通過タイム(秒)		6.39		10.74		15.73		21.25	10.34	55-100
		区間タイム(秒)		6.39	4.35	4.99	5.52							
		浜名(3)静岡		スピード(m/秒)	8.61	10.34	9.91	9.16						
4	9	樋口 一馬	21.41	通過タイム(秒)		6.64		11.09		16.04		21.41	10.12	55-100
		区間タイム(秒)		6.64	4.45	4.95	5.37							
		松商学園(2)長野		スピード(m/秒)	8.28	10.12	9.99	9.42						
5	5	大嶋 健太	21.44	通過タイム(秒)		6.48		10.87		15.87		21.44	10.25	55-100
		区間タイム(秒)		6.48	4.39	5.00	5.57							
		東京(3)東京		スピード(m/秒)	8.49	10.25	9.89	9.07						
6	3	小池 真郁	21.54	通過タイム(秒)		6.72		10.99		16.06		21.54	10.53	55-100
		区間タイム(秒)		6.72	4.28	5.07	5.48							
		久我山(3)東京		スピード(m/秒)	8.19	10.53	9.76	9.23						
7	2	勝瀬 健大	21.57	通過タイム(秒)		6.52		10.99		16.07		21.57	10.06	55-100
		区間タイム(秒)		6.52	4.47	5.08	5.50							
		咲くやこの花(3)大阪		スピード(m/秒)	8.43	10.06	9.73	9.20						
8	8	齋藤 諒平	21.68	通過タイム(秒)		6.70		11.19		16.22		21.68	10.02	55-100
		区間タイム(秒)		6.70	4.49	5.03	5.46							
		九里学園(1)山形		スピード(m/秒)	8.21	10.02	9.82	9.26						
9	1	伊深 愛生	21.71	通過タイム(秒)		6.74		11.26		16.28		21.71	9.96	55-100
		区間タイム(秒)		6.74	4.52	5.02	5.43							
		立命館慶祥(2)北海道		スピード(m/秒)	8.16	9.96	9.84	9.31						

日本陸上競技連盟科学委員会

風速(-1.5m)

国際陸上競技連盟 (IAAF) カウンシル会議 (北京) 報告

前 IAAF カウンシルメンバー 田中克之

2015年8月、第50回IAAF総会及び第15回世界陸上競技選手権大会が北京において開催されたが、その前後に同地において2度に亘りIAAFカウンシル会議が開催された。8月17日(月)の会合は通常のカウンシル会議であり、2011～15年を任期とするカウンシル・メンバー(理事)による実質上最後の会合であった。他方、8月30日(日)は同メンバーによる会合であったが、北京大会を暫定的に評価することを目的としたもので、30分程度の短い内容であった。両カウンシル会議の概要は以下の通りである。

1. カウンシル会議 (8月17日)

1. 会議の雰囲気と特筆事項

- (1) 2日後に会長を始めとするカウンシル・メンバー(理事)の選挙を控えているだけに一言で言えば「心ここにあらず」「余り波風を立てたくない」という雰囲気支配的な会合であった。
- (2) その中であって、活発な議論が行われたのは8月初めに独の公共放送ARD、英国のサンデー・タイムズで報道された陸上競技界のドーピング問題であった。色々な意見が出されたが「報道内容は誤解や偏見に基づくもので、センセーショナルで人心を惑わす類いの内容である。生体パスポートやIAAFのドーピングに対する姿勢、現場での取り組みについての認識不足も甚だしい。この種報道に対しては厳正に対処すべきである」というのがカウンシルの結論であった。他方「IAAFの生体パスポート内容が一部漏洩しているようであるが、これについてはどのように考えているのか」との質問に対し、事務総長より「由々しき事態である。窃盗及び秘密漏洩ということでモナコの警察当局に捜査を依頼した。職員に対する聞き込みや文書の閲覧が行われている」との答があり、またARDとサンデー・タイムズに対しても法的措置を執ることを検討中であることが明らかにされた。
- (3) ディアック会長は、これが実質的に自分にとっては最後のカウンシル会議だとして①会長とIAAFとのこれまでの関わりを具体的事例を挙げながら淡々と語り②民主的で財政的に安定したIAAFを(コー、ブカ両候補のいずれが勝利しても)信頼のおける後任に委ねることが出来ることを喜んでいるとの趣旨の冒頭挨拶を行い、理事一同から大きな拍手を受けた。ディアック会長の任期は実質約16年に亘ったが、いわゆる「上から目線」ではない言動で民主的運営を行ったこと、財政基盤を安定させたこと、世界選手権大会をはじめとするWAS (IAAF主催) 大会の開催地をよりグローバル化する等して陸上競技を全世界的に普及させようと努力したことは率直に評価すべきであろう。
- (4) 前回のIAAFモスクワ総会でもIAAFの組織改正に関わる憲章改正について、総会はカウンシルの提案を否定する決定を行ったが今回も同様のことが起こった。今次総会に諮るIAAF憲章改正提案に「IAAF理

事選挙が行われる総会時に70歳を超える者は理事選挙に立候補することが出来ない」「連続して3期12年務めたIAAF会長は再選できない」「4人の副会長のうちの一人は女性とする」とする趣旨の提案があったが、カウンシルは時間的制約もあり、これらの提案を十分審議することなく「この提案は新しいコミッション、新しいカウンシルで審議し2年後の総会で決定」するとの意見を付して総会に提出することにした(しかし、総会では、今次総会で決定すべきであるとの意見が多数を占め、内容に関する審議が行われぬまま、いきなり投票に付され賛成多数で可決された。これはいわばカウンシルが総会により「押し切れ、面目を失墜」したケースに当たるが、本提案のようなカウンシル・メンバー(理事)の身分に関わる変更はカウンシル内では合意を得るのが極めて困難という事情もあるので、総会は強引ではあったものの合理的な決定を下したとも言えよう)。

- (5) 会合の最後に、WAS大会(World Athletics Series = IAAF主催大会)をより魅力的なものにするために2014年に設置された「刷新作業部会」の最終報告書がカウンシルに提示された。IAAFが今後取り組むべき刷新のための提案書とも呼べるものであるが、これらの提案をどのようにフォローアップするかは新しいカウンシルに委ねられることになった。これらの提案はIAAFのみならず世界各国の陸上競技連盟にとっても大いに参考になるものと思われる。

2. 事務総長報告の特徴点

事務総長報告は通常、前回理事会以来の主要なIAAF活動を理事会に報告するものであり、カウンシル審議も通常はこの報告書をベースにして行われる。今回の事務総長報告で多くの理事の関心を集めたのは次の点であった。

(1) スポーツ仲裁裁判所関連案件

①スポーツ仲裁裁判所(CAS)で係争中のIAAF案件は11件であったが、3件は解決した(内2件はIAAFの申し立てが認められ、他の一件は認められなかった)。1件は中間的解決をみた。その他の件は依然審議中で結論が出ていない。これらの案件のうち1件を除く他の10件は全てドーピングに関わる案件である。

②中間的解決をみた案件はインド人に関わる案件である。2011年4月のカウンシルは「女性競技への疑似女性参加を防止するため、通常の男性が有する値の範囲に入るアンドロゲン値を示す人物は女子競技には参加させないことにする」旨の決定を下し、これをIAAF規則に取り入れたが、このインドのケースはIAAF規則に基づきインド人女性の競技参加を認めなかったインド陸連の措置に抗議しCASに持ち込まれた案件である。

CASはIAAFの決定及びこれを取り入れた競技規則は真摯な考えに基づいて行われていると認めつつも「通常の男性が有するアンドロゲン値を持った女子選手がそうで

ない女子選手よりも競技上の優位性を持つ」という詳細データの提出を求め、他方において「これらのデータが提出されるまで2年間に亘りIAAFの関連規則は執行停止とすべきである」と中間的に裁定した。

- ③ロシア競歩選手のドーピング問題は国際的関心を呼んでいるが、これは生体パスポートに由来する案件である。生体パスポートの検査値の動きから問題ありとされて来た6名のロシア人選手(殆どが著名競歩選手)に対するロシア側の措置内容に付きロシア陸連からIAAFへの通報が大幅に遅れたのを受け2014年9月、IAAFはCASに対し申し立てを行った。その後、ロシアドーピング防止機構からは直ちに迅速な措置をとる旨の回答があり、その後これら選手に2年半から無期限の競技参加禁止措置をとった旨、連絡をした。IAAFはこのことを関係選手がIAAFドーピング規則違反を犯したことを認めた上で彼等に制裁が加えられるものであると了承した。しかし、IAAFドーピング審査委員会(DRB)は「ロシア陸連の制裁は選手の競技結果を過去に遡って無効としていないのが問題である」との見解を示したため、IAAFは改めて関係競技者6名一人一人についてCASに対し異議申し立てを行った。このため本件は現在手続き進行中である。

(2) 市民権の変更

世界陸上選手権大会の直前のカウンシル会議には、当該世界選手権大会へ駆け込み参加が可能になるよう、多くの選手の市民権の変更報告が行われる。今次事務総長報告でも48名に上る競技者の市民権変更が報告された。いつもであればアフリカから中東諸国への変更が多いのであるが、今回の特色はウクライナからロシア(9名)、アゼルバイジャン(2名)への変更が多かったのが特徴である。近年のロシア-ウクライナ紛争が陰を落としていることが垣間見える。他方エチオピアからも5名が市民権変更しているが行き先はスーダン(4名)、米国(1名)となっており従来の行き先と変わって来ている。

3. WAS大会をより魅力的なものにするための「刷新作業部会」最終報告書

陸上競技への関心が徐々に低下し、他スポーツとの競争が激化している中で世界選手権及びWAS大会をより魅力的なものにする方途を探る目的でIAAFは2014年に「刷新作業部会」を設置した。同刷新作業部会は有識者も入れたワークショップでの討議結果も踏まえ、刷新のための提案を盛り込んだ最終報告書を今次カウンシル会合に提出した。時間的な制約から、今次会合では主要提案の説明だけが行われるに留まったが、これら提案をどのように実施に移すのか(あるいは移さないのか)は新しいカウンシルメンバーの手に委ねられることになった。なお、最終報告書に盛り込まれた提案のいくつかを紹介すれば次の通りである。

- ①コンチネンタル・カップのフォーマットを変更すること(例えば競技会を盛り上げる視点から、大陸別チームではなく国別チームをベースにした参加態様にする)
- ②世界選手権大会を陸上競技シーズンのクライマックス・イベントとすること(このため同選手権大会を8月末又は9月に開催することとし、他方において陸上競技シーズンの開始を早めることにする)。

- ③フィールド競技のフォーマットをより革新的なものにすること(例えば予選を行わず最初から決勝競技とする。試技数も減らす)
- ④イベント・プロモーションのため、ソーシャル・メディアを戦略的かつより幅広く活用する、オンラインでの視聴アクセスを拡大する。
- ⑤(WAS刷新ワークショップが提案したような)マラソンと競歩を世界選手権大会から外すことはやるべきではない。逆にマラソンと競歩の魅力をより発揮できるような措置をとるべきである(例えば(イ)IAAFのコントロールを高め(ロ)生データへアクセスできる専門のプレゼンターを確保し(ハ)GPSトラッキング・システムを利用し、全競技者のリアルタイムデータへのアクセスを拡大するなどして放映番組内容を改善する)

II. カウンシル会議(8月30日)

今次世界陸上選手権大会の暫定的評価を行うために旧カウンシルメンバーによる会合が開催された。一言で言えば「これまでの大会の中で最上級に入る大会」という評価であった。説明、発言要旨は次の通りである。

1. (事務局説明)

- ①今世界陸上選手権は記録づくめであった(世界新記録1、今季世界最高記録14、地域新記録11、国別新記録87)。
- ②207国/地域より選手1873名が参加した(ファイナル・エントリー数は1942名)
- ③観客数は午後の部については連日満員であった。8月29日までで延べ観客数は685,565名となった。
- ④TV放送も200国/地域で放映された。全体の視聴者数は未だ把握されていないがアジアでの伸びが素晴らしかった。前回のモスクワ大会を上回ることになるのは確実である。

2. (ディゲル理事-IAAF組織代表一)

- ①車の車数規制、一部工場の閉鎖措置がとられたこともあり心配された大気汚染はなかった。天候にも恵まれた。大成功と言って良い大会であった。競技場の観客は競技に対する反応から見ても一部は明らかに動員された観客ということがわかったが、中国選手が活躍したこともあり、会場は大いに盛り上がった。
- ②TV視聴率は事務局からも説明があったが、中国や日本を含むその他アジアは傑出した結果、ヨーロッパもたいへん素晴らしいものであったと言える。
- ③今大会ではマスターズの競技(女子400m,男子800m)がエキジビションとして大会8日目の午後の部直前に行われたが、次回大会でもマスターズを入れるのであれば、何日目に入れるのが良いか再検討した方がよい。

3. (オドリオゾラ理事-IAAF技術代表)

自分が知っている限り、競技運営の視点からみてこれまでの世界選手権の中で最高の大会だった。

4. (フレデリックス理事-IAAF選手コミッション委員長)

今次大会ではIAAF選手コミッションメンバー6名を選ぶ選挙が行われた。立候補者は16名であった。当選者はValery ADAMS(ニュージーランド)、Mutaz BARSHIM(カタール)、Yelena ISINBAEVA(ロシア)、Andreas THORKILDSEN(ノルウェー)、Christian OLSSON(スウェーデン)、室伏広治(日本)の6名である。

国際陸上競技連盟(IAAF)総会報告

事務局

IAAF総会が世界選手権開幕に先立つ8月19日と20日、中国・北京で開催された。

IAAF総会は、2年に1回実施され、選挙を主目的とした総会とルール修正を主目的とした総会を交互におこなっている。

本年は、選挙が主目的であったが、そのほか、緊急のルール修正を含めた、下記の議題が審議された。

1. 総会開会式

2015年8月18日(火)

- 1.1 歓迎の挨拶
- 1.2 開会宣言
- 1.3 名誉橋授与式

2. 議事

2015年8月19日(水)～20日(木)

- 2.1 総会開式通告
- 2.2 開式
- 2.3 IAAFベテランピン授与式
- 2.4 招集
- 2.5 選挙立会人承認
3. 前回総会議事録承認
4. カウンシル報告 — 規則修正提案を含む
5. 加盟団体資格
 - コソボと南スーダンの新規加盟確認
 - ガボンの資格停止
6. 財政—名譽会計及び財務予算コミッションによる報告
7. 会長立候補者による選挙演説
8. 選挙

- 8.1 会長
- 8.2 副会長—4人
- 8.3 名誉会計
- 8.4 地域代表の確認—6人
- 8.5 女性カウンシルメンバー—6人
- 8.6 カウンシル個人メンバー—9人
- 8.7 技術委員会(委員長—女性メンバー3人—メンバー12人)
- 8.8 女性委員会(委員長—男性メンバー2人—メンバー8人)
- 8.9 競歩委員会(委員長—女性メンバー2人—メンバー8人)
- 8.10 クロスカントリー委員会(委員長—女性メンバー2人—メンバー8人)

9. 憲章修正提案

10. 競技会規則修正提案

- 10.1 第1章—国際競技会
- 10.2 第2章—競技者の資格
- 10.3 第3章—アンチドーピング
- 10.4 第4章—紛争
- 10.5 第5章—競技規則—憲章13条6により、総会での審議が必要とされる修正提案のみ

11. 倫理規定

12. 地域陸連からの報告

- 12.1 アフリカ
- 12.2 アジア
- 12.3 ヨーロッパ
- 12.4 北中米カリブ
- 12.5 オセアニア
- 12.6 南アメリカ

13. 委員会からの報告

- 13.1 技術委員会
- 13.2 女性委員会
- 13.3 クロスカントリー委員会
- 13.4 競歩委員会

14. コミッションからの報告

- 14.1 選手コミッション
- 14.2 コーチコミッション
- 14.3 競技コミッション
- 14.4 普及コミッション
- 14.5 法務コミッション
- 14.6 マーケティング & プロモーションコミッション
- 14.7 マスターズコミッション
- 14.8 医事 & アンチドーピングコミッション
- 14.9 プレスコミッション
- 14.10 道路競走コミッション

14.11 スクール & ユースコミッション

14.12 持続的發展コミッション

14.13 テレビコミッション

15. 組織委員会からの報告

- 15.1 リオ2016—第31回オリンピック競技大会
- 15.2 北京2015—第15回IAAF世界選手権大会
16. その他の事項
17. 次回総会の日にちと場所
18. 総会閉会

◆選挙

今回の総会では、4年任期となるIAAFカウンシル(理事)及び委員会メンバーの改選がおこなわれた。1999年から約16年にわたり会長の職にあったディアック氏の引退を受けて、副会長職にあったかつての名選手、イギリスのセバスチャン・コー氏とウクライナのセルゲイ・ブブカ氏による激しい選挙活動が繰り返されたが、115票対92票でコー氏が新会長に選出された。続いて行われた4名定員の副会長選挙では、ブブカ氏が187票を獲得してトップ当選を果たした。その後、おこなわれたカウンシル選挙では、日本から、2期つとめた田中克之氏に替わり、横川浩会長が立候補し初当選を果たした。委員会選挙では、日本からは技術委員会と競歩委員会に立候補し、2名とも再選を果たした。カウンシル選挙では、韓国がポストを失ったものの、副会長に再選のカタールのほか、日本、中国、UAE、インド、サウジアラビアのアジア6か国が当選という大躍進を遂げた。

なお、カウンシルは、会長、副会長、財務担当理事、女性メンバー、個人メンバー、エリア代表からなり、選挙は、エリア代表を除く、ポジションごとに順に実施される。

IAAF加盟国は、それぞれ1票を有し、各ポジションの定数の人数分、投票するというシステムとなっており、横川会長が立候補した個人メンバーは定数9名であるので、各国9名に投票できることになる。

投票により、絶対多数(有効投票の過半数)を獲得した上位から当選が決まるが、絶対多数獲得者が定数に満たない場合、2回目の投票が実施され、得票上位者から当選となる。

横川会長は、個人メンバーの1回目投票では103票を得て4位の結果であったが、過半数105票にわずかに足りず、2回目の投票にまわり、98票のトップで当選となった。

【選挙結果】

カウンシル個人メンバー(9人) 有効投票数209票 過半数105票

横川浩 103票(4位) 過半数に足らず2度目の投票へ
2回目 98票(2度目の投票トップ、全体で4位) 当選
技術委員会(12人) 有効投票数208票 過半数105票

関幸生 145票(1位) 当選

競歩委員会(8人) 有効投票数202票 過半数102票

今村文男 119票(2位) 当選

◆憲章と規則の主要修正

今回の総会は、選挙が主目的であったが、憲章及び規則の修正提案についても議題となった。

憲章では、複数のIAAF加盟国から提案のあったカウンシルの任期等に関する提案が投票の結果、承認された。それら提案はつぎの3件であった。

・IAAF理事選挙が行われる総会時に70歳を超える者は理事選挙に立候補することが出来ない

・連続して3期12年務めたIAAF会長は再選できない

・4人の副会長のうちの一人は女性とする

カウンシルは、これら提案に反対の立場であったが、複数の加盟国から反発の発言が相次ぎ、圧倒的多数で可決されることとなった。この結果、ディアック前会長は16年、ネビオロ元会長は18年にわたり会長職にあったが、今回の選挙で選出された58歳(選挙時)のコー新会長は最長で任期12年ということになる。

競技規則については、IAAF憲章が6年前の総会で改正されたことにより、競技規則については、総会での決定が必要とIAAFカウンシルが認めた「重要案件」を除く修正提案については、カウンシル会議での決定が最終となるため、本総会では修正内容の報告のみとなった。

各国陸連などからの競技規則修正提案は139件あり、承認108件、却下31件という結果であった。日本とIAAF競歩委員会から提案のあった「競歩のピットレーン・ルールの明文化」も承認され、2016年版ルールブックから明文化されることとなった。

競技規則の修正については競技運営委員会と内容確認の後、日本での適用について2016年の全国競技運営責任者会議において報告される。

大会観戦ガイド

第46回ジュニアオリンピック 陸上競技大会

中学生アスリートの夢の舞台、ジュニアオリンピック！リレー日本一を決定する日本選手権リレーも同時開催！ぜひ日産スタジアムに足を運んで下さい！

▼日時：10月23日（金）～10月25日（日）

▼場所：日産スタジアム

神奈川県横浜市港北区小机町3300

▼アクセス：JR新横浜駅から徒歩15分、
地下鉄新横浜駅から徒歩12分、
JR小机駅から徒歩7分

▼種目

〈男子〉

区分A：100m、200m、3000m、110mJH、走高跳、砲丸投

区分B：100m、1500m、110mH、走幅跳、砲丸投

区分C：100m、1500m、走幅跳

区分A・B・C共通：円盤投、ジャベリックスロー、4×100mリレー

〈女子〉

区分A：100m、200m、3000m、100mYH、走高跳、砲丸投

区分B：100m、1500m、100mH、走幅跳、砲丸投

区分C：100m、800m、走幅跳

区分A・B・C共通：円盤投、ジャベリックスロー、4×100mリレー

*年齢区分：2015年4月1日を基準として満年齢によって、下記のとおり3区分する

A. 14歳以上～15歳未満（2000（平成12）年4月2日生～2001（平成13）年4月1日生）

B. 13歳以上～14歳未満（2001（平成13）年4月2日生～2002（平成14）年4月1日生）

C. 12歳以上～13歳未満（2002（平成14）年4月2日生～2003（平成15）年4月1日生）

▼入場料：1,000円（1日）

※65歳以上・高校生以下無料 ※当日券のみ

▼問合せ先：神奈川県陸上競技協会

TEL：045-210-9660 / FAX：045-210-9667

▼大会公式ページ

ジュニアオリンピック

<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1286/>

第99回日本陸上競技選手権 リレー競技大会

リレー日本一を決定する日本選手権リレー！ジュニアオリンピックも同時開催！ぜひ日産スタジアムに足を運んで下さい！

▼日時：10月23日（金）～10月25日（日）

▼場所：日産スタジアム

神奈川県横浜市港北区小机町3300

▼アクセス：JR新横浜駅から徒歩15分、
地下鉄新横浜駅から徒歩12分、
JR小机駅から徒歩7分

▼種目

【日本選手権リレー】

〈男子 2種目〉

4×100mリレー、4×400mリレー

〈女子 2種目〉

4×100mリレー、4×400mリレー

▼入場料：1,000円（1日）

※65歳以上・高校生以下無料 ※当日券のみ

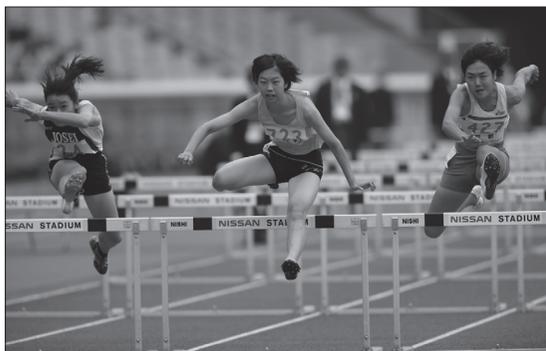
▼問合せ先：神奈川県陸上競技協会

TEL：045-210-9660 / FAX：045-210-9667

▼大会公式ページ

日本選手権リレー

<http://www.jaaf.or.jp/taikai/1285/>



昨年度の大会より（A女子100mYH決勝）



昨年度の大会より（女子4×400mRで優勝した東大阪敬愛高）

JAAF OKAYAMA 一般財団法人岡山陸上競技協会

〒700-0012 岡山市北区いづみ町2-1-11 岡山県陸上競技場内
TEL.086-214-3156 FAX.086-214-3156
http://www.tiki.ne.jp/~oka-rikkyou/

第15回世界陸上競技選手権大会に重友梨佐選手・小原怜選手(天満屋)が出場し頑張ってくれました。

この代表としての頑張りを本県のパワーとし今後の大会へ生かしていきたい。

来年度の全国高校総体は岡山で開催され、高体連陸上競技部を中心に強化が進められており、高校生の意識は高まっている。

トラックシーズン後半を迎え、和歌山国民体育大会では成年・少年女子を中心とした活躍が期待される。シーズンを有終の美で締めくくりマラソン駅伝シーズンへ勢いを繋ぎたい。

きたる11月8日には第1回おかやまマラソンも実施され、県民の声援でランナーを応援したい。

今後おこなわれる実業団駅伝・高校駅伝・都道府県駅伝でも選手の活躍を期待したい。

JAAF YAMAGUCHI 一般財団法人山口陸上競技協会

〒753-0815 山口市維新公園4-4 維新百年記念公園陸上競技場内
TEL.083-920-6125 FAX.083-920-6125
http://yaaf.jp/

山口陸上競技協会は6月末で8年間、専務理事を務め2011山口国民体育大会を成功裏に導いた立役者の園田隆が退任し、山縣康人が新たに専務理事に就任し、齋藤永会長のもと新体制がスタートしました。

平成27、28年度一般財団法人山口陸上競技協会の業務執行役員を紹介します。

- ・会長 齋藤永
- ・副会長 須田雅昭、東福俊明、磯部芳規、園田隆
- ・専務理事 山縣康人
- ・常任理事 衛藤憲生(競技運営委員長)、島田敏幸(強化委員長)、山本博史(総務委員長)、藤田昌彦(普及育成委員長)、西村信勝(記録情報委員長)、濱田真由美(女性委員長)、齋藤英美(競技運営副委員長)
- ・事務局長 藤田昌彦

この体制で運営していきますが、財政基盤の強化、中・高一般の連携強化、競技役員の高齢化対応等、課題は山積みであり、腰を据えたい取り組みが必要となっています。山口国民体育大会開催にあたり、選手強化と競技運営力強化を図り大きな成果を得ることができましたが、4年が経過するとその貯金を食いつぶした感があり、選手強化については国民体育大会や全国高等学校総合体育大会、全日本中学校陸上競技選手権大会等でチーム山口として総合力を発揮して好成績を納めるところまでには至っていません。一方、競技運営については山口陸上競技協会主催大会では国民体育大会での運営方法をそのまま継続しており、観衆や他県来場者からは好評価を得ていますが、審判員の高齢化と若者離れ対策は遅れており、大きな課題となっています。これらに対しては従来と同じ取り組みでは課題達成は困難であり、積極的かつ斬新な対応も必要であり、新体制に大きな期待が寄せられていることを肝に銘じて、山縣専務理事を中心に関係者が一枚岩となって取り組んでいくことにします。

平成18年から開催してきました西の京山口での「全国中学校駅伝大会」が、12月13日の第23回大会をもって終了することになります。一抹の寂しさを感じるころですが、日本中学校体育連盟の先生方を中心に全国大会を10年連続で開催し、幾多の有望選手も誕生して大きな成果を挙げたということを財産とし、次の開催地滋賀県に引き継いでいくことにします。(文責：競技運営委員長 衛藤憲生)

JAAF HIROSHIMA 一般財団法人広島陸上競技協会

〒730-0011 広島市中区基町4-1
県立総合体育館(公財)広島県体育協会内
TEL.082-223-3256 FAX.082-222-6991
http://www1.ocn.ne.jp/~hrk34/index.htm

2015年6月13日、本協会は役員の変更を行った。三宅副会長の勇退に伴い、東川専務理事が副会長へ、そして河野専務理事が着任、事務局も榎谷事務局長から秋山事務局長へとバトンタッチした。

- 名誉会長 亀井郁夫
- 会長 佐々木秀昌
- 副会長 渡部伸夫 東川安雄
- 専務理事 河野裕二
- 常務理事 秋山定之(事務局長) 中野繁 浜崎正信
- 総務委員長 灰原利彦 企画広報委員長 藤原文代
- 強化委員長 中野繁 競技運営委員長 福地光文
- 副委員長 樋口裕志 施設用器具委員長 元吉揮晃
- 指導普及委員長 大田恒二 科学委員会 佐々木英夫
- 情報処理委員長 秋山定之

以上のような新体制で、新たな構想にチャレンジしていく予定。

さて、第99回日本陸上競技選手権大会男子110mHにおいて13秒81で高山峻野選手が優勝したことは、とても嬉しいニュースであった。新たなスター選手の出現に、改めてジュニア時代からの育成の大切さを感じた。この選手も、広島ジュニアとして大切に育て、強化の育成支援を受けていた一人である。広島では、広島かけっこキャラバン「小学生陸上教室」出前講座を年間通して実施している。今年度も25会場で大学生を指導者に迎え、子どもたちに陸上競技の楽しさを知ってもらう機会をつくっている。また、キッズを対象とした記録会の開催やクリニックなど普及活動を実施している。今後も、普及活動・タレント発掘事業、小中、中高のつなぎの強化などに取り組んでいきたい。(文責：企画広報委員長 藤原文代)

JAAF TOKUSHIMA 一般財団法人徳島陸上競技協会

〒772-0011 鳴門市撫養町大鼻島字湊浜6-23
TEL.088-678-7914 FAX.088-678-7921
http://www.jaafokushima.com/

6月の評議会で2015、16年度の協会役員が決まりました。主な役員は次のとおりです。よろしくお願ひします。

- 会長(代表理事) 卯木英司
- 副会長(業務執行理事) 藤本繁 南邦明 横手美男
- 理事長(業務施行理事) 佐竹昌之
- 事務局長(業務執行理事) 難波康夫

先般行われた北京での世界陸上競技選手権大会では、本県の金丸祐三選手、伊藤舞選手(ともに大塚製薬)が出場し、伊藤選手が女子マラソンで7位入賞、そして、来年のリオデジャネイロ・オリンピックの内定を得ました。2020年の東京オリンピックにも本県アスリート代表選手として送り込むことが選手強化の面での大きな目標です。現時点の有望種目として投てき種目があり、中田恵莉子選手(四国大学職員)、幸長慎一選手(生光学園高校)等に期待がかかります。

普及面では、7、8年後に開催が予定されている全国大会等を目指して、小学生、中学生への普及育成、高校生への強化に努めていきます。そのためには、練習場所の確保が重要です。本県の陸上競技場は、鳴門市のボカリスエツスタジアム(第1種・第3種)と徳島市の市営陸上競技場(第2種)がありますが、県南には全天候の競技場がありません。2020年を目標に、写真判定装置を常設した全天候400mの競技場(第3種)が計画されています。本協会としても、より良いものを目指し、県に対して要望していきたいと思ひます。(文責：理事長 佐竹昌之)

事務局からのお知らせ

◆◆リオデジャネイロオリンピックに向けた戦いが始まっています！◆◆

来夏、ブラジル・リオデジャネイロで開催される第31回オリンピック競技大会のマラソン・競歩のこれからの選考競技会は下記の通りです。

是非、競技場・沿道で代表をかけた熱い戦いに応援をお願い致します。

〈男子マラソン〉

- ・第69回福岡国際マラソン選手権大会 2015年12月6日(日)開催
- ・東京マラソン2016 2016年2月28日(日)開催
- ・第71回びわ湖毎日マラソン大会 2016年3月6日(日)開催

〈女子マラソン〉

- ・第1回さいたま国際マラソン大会 2015年11月15日(日)開催
- ・第35回大阪国際女子マラソン大会 2016年1月31日(日)開催
- ・名古屋ウィメンズマラソン2016 2016年3月13日(日)開催

〈男子競歩〉

- ・第54回全日本50km競歩高畠大会 2015年10月25日(日)開催
- ・第99回日本陸上競技選手権大会・20km競歩 2016年2月21日(日)開催
- ・第40回全日本競歩能美大会 2016年3月20日(日)開催
- ・第100回日本陸上競技選手権大会50km競歩 2016年4月17日(日)開催

〈女子競歩〉

- ・第99回日本陸上競技選手権大会・20km競歩 2016年2月21日(日)開催
- ・第40回全日本競歩能美大会 2016年3月20日(日)開催

◆◆日本選手権リレー・ジュニアオリンピックの動画を公開します！◆◆

10月23日(金)から10月25日(日)まで、神奈川・日産スタジアムで開催する第99回日本陸上競技選手権リレー競技大会、第46回ジュニアオリンピック陸上競技大会の動画を昨年に引き続き公開致します。激戦の様様をもう一度、お楽しみ下さい。

アクセスは <http://japanathletics.tv/> まで

※6月26日(金)～28日(日)に新潟・デンカビッグスワンスタジアムで開催しました第99回日本陸上競技選手権大会の動画は好評公開中です！



昨年のジュニアオリンピックの様子

陸連時報編集委員

◇編集委員

- 横川 浩 (陸連会長)
- 友永 義治 (陸連副会長)
- 八木 雅夫 (陸連副会長)
- 尾縣 貢 (陸連専務理事)
- 原田 康弘 (陸連強化委員長)
- 風間 明 (陸連事務局長)
- 牧野 豊 (陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘

◇時報編集担当

- 繁田 進
- 石塚 浩
- 木越 清信
- 宮田 宏
- 高橋 祐哉
- 小川ちあき

陸連時報編集室

〒163-0717

東京都新宿区西新宿2-7-1

小田急第一生命ビル17階

公益財団法人日本陸上競技連盟 内

TEL 03-5321-6580

FAX 03-5321-6591

WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>

公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>